

● ● ● 読み下し文 ● ● ●
黄葉園隨筆 山形

山形の町に高一尺余りの赤色の石あり。土人、市の神といふ。此の石、奇石と見入て至て羨じき石也。

最上領、尾花沢の駅に鈴木久左衛門といふ豪家あり、昔此の家に者せ越(芭蕉)の門人清風といひし人あり、者

せ越(芭蕉)を請持(こじ)じて、其のため、者せ越(芭蕉)の事跡多し、此所の庭に檜の化石あり。高六尺余り、九七八尺の枝あつて共に石となり。

● ● ● 読み下し文 ● ● ●

おくの細道 三十才 尾花沢

尾花沢にて、清風といふ者を尋

ぬ。可連(被)ハ、富(とめ)るものなれども、志山やじからず。都にも折々可よひて、さ

す可に、旅の情をも知りたれハ、日比

どどめて、長途の山たハリ、さまままに

もてなじ侍(は)へる。

涼じきを 我宿にして ね(まる)る也

尾花沢で清風という者を訪ねた。この人は、富裕な人ではあるが、金持ちにありがちな心の卑じさがない。

又、都にも折々往来して旅人の心持ちもよく知っているので、自分たちを何日も引きとめ、長途の勞をねぎらい、いそいそもてなじてくれた。

涼じきを我が宿にしてねまるなり

ねまるーくつろいで座る處、地元の方書

